JOHN W. DOWER

ジョン・W.ダワー

THE アメリカ VIOLENT 暴力の世紀 AMERICAN

第二次大戦以降の戦争とテロ

田中利幸 訳

CENTURY

WAR AND TERROR SINCE WORLD WAR II

岩波書店

第二次大戦および冷戦の覇者、アメリカ。そのアメリカは、どのような経緯で現在の世界の、そして自国の混沌を生み出してしまったのか。

大ベストセラー『敗北を抱きしめて』の著者があらたに取り組む、アメリカの暴力の歴史。軍事をめぐる歴史と、テロなどの不安定の連鎖拡大の現状について、簡潔に、かつ深く洞察した全世界待望の書。本書には特別の書下ろしとして、トランプ時代を危惧する日本語版オリジナルの序文を付す。

トランプはアメリカであり、アメリカは私たちである。自分たちだけの問題などということはもはやあり得ない世界に、私たちはどのような道を見出すことができるのか？

第二次大戦および冷戦の覇者、アメリカ。そのアメリカは、どのような経緯で現在の世界の、そして自国の混沌を生み出してしまったのか。

大ベストセラー『敗北を抱きしめて』の著者があらたに取

靖子に捧げる

THE VIOLENT AMERICAN CENTURY
War and Terror Since World War II
by John W. Dower
Copyright © 2017 by John W. Dower
First published 2017 by Haymarket Books, Chicago.

This Japanese edition published 2017
by Iwanami Shoten, Publishers, Tokyo
by arrangement with John W. Dower
c/o Georges Borchardt, Inc., New York
through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo.

日本語版への序文

原著英語版の序文(「はじめに」)にあるように、『アメリカ 暴力の世紀』*の最終原稿は二〇一六年九月に出版社に提出された。したがって、第二次世界大戦で始まりその後七〇年間続いた世界的規模でのアメリカの軍事化と暴力に関するこの本での解説は、バラク・オバマ政権の最終期で終わっており、二〇一七年一月に始まったドナルド・トランプ政権についてはなにも述べていない。

それでは、いわゆる「アメリカの世紀」に対してトランプ政権が与える衝撃については、いったい何が補足できるであろうか。日本の読者に向けてこの新しい序文を書いている今(二〇一七年夏)の段階では、多くのアメリカ人と世界の大部分がドナルド・トランプを不安の目で見ている。私の個人的な考えでは、彼は、世界で最も強力な国家を指導するにふさわしい知性も気質も備えていないように思える。彼は読書をしない。物事の詳細を知ろうとする忍耐力を全く持っていないし、物事の正確さや真実を尊重することもない。彼の注意力は薄弱で、英語の表現はとりわけ粗野である。オバマ大統領が知性溢れ、表現力も豊かであったのとは極めて対照的である。

対照的なのはそれだけではない。現大統領は歴史を理解する能力に欠けるし、歴史に対する興味もない。彼の白人としての人種差別主義は露骨で、女性を侮辱することにも喜びを感じている。金持ち

と権力を持っている人間は別として、他人と共感するということができないし、アメリカの伝統的な同盟国の政治家よりは、世界の独裁的なリーダーを相手にすることに満足感をおぼえるように思える。トランプと彼に近い関係にある支持者たちは科学と知的作業一般をバカにし、現在、まさに地球の存在そのものを脅かしている二つの脅威を、「インチキ」だとみなして無視している。その二つの脅威とは、一つは気候変動であり、もう一つは核兵器の「現代化」とさらなる拡散の可能性である。

そうした中でも最も重要なのは、トランプ大統領が世界のリーダーとして、「支配」以外に、アメリカの将来について明確な展望をなんら持っていないという、ひじょうに不安な状況にあるということである。「アメリカ・ファースト」や「アメリカを再び偉大な国にする」という彼の好戦的な宣言が意味しているのは、根本的にはそういう不安のことなのである。アメリカ合衆国がこれまで防衛してきたと主張する価値観には全く関心がない。そうした価値観とは、民主主義、規則に則った世界秩序、国際条約の重要性、人権ならびに市民権の擁護、最適な多国間協力という理想などである。「社会正義」というのは、彼の政治用語においては軽蔑すべき言葉なのである。「国際主義」も同じように扱われている。

そのような反動的かつ自己愛的で、悪名高いほど激情的な人間が、現在、そしてこれからの数年間、圧倒的に破壊的な暴力を使う権限を持っているということは恐ろしいことである。トランプが、国内の政治的困難に応じるために、海外に攻撃先を求めていくということを想定するのは不当なことではない(歴史家や政治学者にとっては、国内問題から注意をそらすために海外で事件を起こすというのは、「安全弁」方策という名称でよく知られているやり方である)。こうした方策の中には、北朝鮮あるいはイランに対する軍事攻撃、シリアやアフガニスタン、あるいは中東・北アフリカのその他の国に対する軍事攻撃の可能性が含まれている。現在高まりつつあるロシアや中国との緊張関係が、トランプの病的とも言える自己中心的な行動によって急激に悪化することも十分ありうる。実に驚くべきことだが、すでに彼は、アメリカとEU(ヨーロッパ連合)やNATO(北大西洋条約機構)の関係でさえ不安定にしてしまった。

トランプに対する最も厳しいアメリカの批判者の中には、彼の正気のほどを疑問視し、彼を「一種の病気」と呼ぶ者たちさえいる。これほど頻繁には使われてはいないが、しかし最終的にはもっと不安を呼び起こす表現は、トランプはアメリカと世界の両方に見られる醜悪な流れの兆候でありまたその象徴でもある、と見なすものである。現在の我々にとって極めて危険なことは、トランプ個人ではなく、むしろ彼を世界の全般的状況のバロメーターとしてみることができるという事実である。トランプの不寛容性と「アメリカ・ファースト」の愛国主義は、国際主義の拒否と、世界的に見られる民族間、宗教間の憎悪、愛国主義的な憎悪と完全にマッチしているのである。

もっと具体的に言うならば、トランプの極端な言語表現と行動を好む性癖は、もともとアメリカの気質なのである。彼は、アメリカの国家と社会には力があり、その力が第二次世界大戦以来、繰り返し自国の高貴な理想を唱導し、推進してきたと考えている。しかし同時に、実はそれが、アメリカの軍事化と世界的規模での非寛容性と暴力行使に積極的に加担してきたのである。この後者のアメリカは、常に、偏狭な行為、人種偏見、被害妄想とヒステリーを生み出してきた。ドナルド・トランプのような扇動政治家で残酷な軍事力を重要視する人物は、こうした状況でこそ活躍するのである。いわ

ゆる「アメリカの世紀」のこの暗鬱な戦後史の側面の分析が、この小著のテーマである。

*

「アメリカの世紀」という表現は、『ライフ』、『タイム』、『フォーチュン』などの大衆雑誌を発行していたヘンリー・ルースによって、一九四一年初期に評論の中で使われたことに発している。ルースはこの評論で、アメリカが経済的にも軍事的にも世界で最も強力な国となることを期待して、アメリカの信念と活動の美徳を説明することに多くの字数を費やし、現下の世界紛争が終わり次第、どのように、こうした信念と活動が海外に広められるべきであるかを説いた。ルースがここで明言した理想は、第二次世界大戦に続くアメリカによる(一九五二年まで続いた)日本占領の最初の数年間にアメリカ人征服者によって日本に導入された、一連の改革的な「平和と民主主義」政策にも影響を与えた。こうした改革の中に、今日まで一度も改正されずに維持されてきた日本国憲法が含まれている。

冷戦が深まった一九四七年頃から、アメリカの政治家や政策立案者たちは改革志向の理想主義をほとんど捨て去り、代わりに、国内と世界の両方で「共産主義を封じ込める」という考えにとり憑かれるようになった。占領下の日本では、改革計画の多くが破棄され、保守的な政治的・経済的権力の復活の道が用意されるという、「逆コース」の道がとられるようになった。「逆コース」というあからさまな表現は決して使われなかったが、アメリカ合衆国自体も、同時に、徹底的な軍事化という性格の「逆コース」の道を走り出した。「アメリカの世紀」という表現は基本的に、アメリカの軍事的・経済的な世界覇権を意味するキャッチフレーズとして使われるようになり、それが、一九九一年のソヴィエト連邦崩壊による冷戦終焉後も、長く今日まで続いているわけである。

アメリカ合衆国が絶対的な覇権を握ったことが決してなかったのは明らかである。「冷戦」という表現は、「共産圏」と「非共産圏」が相互に対立しあうという、世界の双極化を意味していた。アメリカ合衆国が「唯一の超大国」となったソヴィエト連邦崩壊後でさえ、世界の大部分はアメリカ政府の影響の外にあったし、いわんや支配下にはなかった。大量虐殺が第二次世界大戦後の世界を破壊し続けた。民族間、部族間、宗教間の破壊行為、政治的破壊行為が、アジア、アフリカ、中東、ラテンアメリカで起きた。そうした破壊行為は、常にではなくとも、しばしば、ソヴィエト連邦またはアメリカ合衆国、あるいはフランスやイギリスといった他の「大国」の、秘密活動やあからさまな介入によって扇動された結果として起きた。恐ろしい残虐行為と人為的、意図的にもたらされた苦痛が共産圏内部で発生したが、それらにはソヴィエト連邦や中華人民共和国での殺人的な国内政策が含まれる。

「アメリカの世紀」の概念を説明するために、様々な事象を本文で紹介したが、同時に、なぜ「アメリカの世紀」という表現が今も意味あるものであるかに関する、私自身の具体的な議論も展開している。第二次大戦以来、アメリカが行使した軍事力と影響力に匹敵するような力を持った国は世界でどこにもないし、歴史的にもそのような国はなかった。アメリカ国防総省の年間「基本予算」は、世界中のその他の主たる国々のすべての軍事予算を合計したものを超える額である。その上、戦争関連活動のための全費用の大部分が実際には秘密にされているか、複雑な会計作業で分からないようになっている。アメリカの軍事エリートは、「技術的非対称性」と、現代のあらゆる紛争分野(すなわち陸・海・空・宇宙・サイバースペース)での「全面領域支配」、その両方をあくまでも維持することに専念

している。かくして、国内の軍事請負会社への永続的支援の確約と、世界的な規模での終わりのない軍拡競争を持続させているのである。

バラク・オバマを含む、第二次大戦以来のホワイトハウスにおけるトランプ以前の全ての前任者が、この終わりなき軍事化に貢献してきた。オバマ政権の最終段階までに、サイバー戦争と無人爆撃機ドローンによる暗殺が、戦争関連技術の非対称性の維持を追求する新提案リストのトップに位置づけられた。「核兵器の現代化」も同じ扱いを受けた。精鋭「特別部隊」による秘密行動の拡大、世界の一四〇カ国に及ぶ国々での中央情報局(CIA)と国防総省による秘密作戦の実施もまた、優先順位の高いリストである。さらに、そうしたリストの中には、海外約八〇〇カ所に設置されたアメリカ軍基地の維持も含まれており、こうした基地の中には小さな都市とも称せる大規模なものから、ひじょうに小さいために、軍事専門家の間で「スイレンの葉」と呼ばれる小規模なものまで、様々である。

オバマ政権が終わったとき、アメリカ合衆国は公表されていたものとしては中東とアフリカで五つの紛争に軍事的に関わっていた。「テロリズム」に対する被害妄想が、警戒監視への強迫観念を生み出し、アメリカは一七の超秘密裏の情報収集組織を持つようになった。アメリカの軍事活動は、一般的に、アメリカ軍事史にかつて見られなかったような激しい度合いで、利益を追求する企業に下請けさせることを通して「民営化」されるようになった。傭兵を雇うというのも、前例のないこうした民営化の一つの傾向であった。情報非公開があたりまえになってしまった。

「国家安全保障国家(national security state)」とか「監視国家」といったような標識的な用語に見られるように、アメリカの政治的な専門用語までが、常に軍事化されるような状態になっている。こうした傾向は冷戦初期にまで遡ることができるものの、一九九一年のソヴィエト連邦崩壊でこの傾向が止むことはなかった。逆に、一九八〇年代に始まったコンピューター化された戦闘といわゆる精密攻撃兵器の出現が、軍事化に新しい技術という刺激をもたらし、戦略立案者たちはそれに夢中になった。その上、アメリカの政策立案者やイデオローグたちは、二〇〇一年の9・11事件でのトラウマのために、「テロリズム」を、かつて地球の存在そのものに対する脅威と見なしていた「共産主義」に代わるものとして見なすようになったのである。こんな状況では、誰が大統領になろうと、民主党と共和党のどちらがアメリカ政治を支配しようと、なんの違いももたらさなかった。

これがトランプ大統領が受け継いだ、集合的心理状態の国民国家である。二〇一七年一月以来、彼の醜悪な人格が繰り返しニュースで取り上げられてきたことは十分理解できるのであるが、しかし同時に、それは誤解を招くものでもある。トランプは、反動的かつ選挙で力のある共和党員を含む数百万人の数にのぼるアメリカ人を操っている。彼は、連邦議会政治が冗談のようなものと見なされるようになり、それゆえ「民主主義」そのものがますます機能しなくなっている国家を統治しているのである。彼は「帝王的大統領」の頂点であり、「防衛」と「安全保障」の名のもとに、政府予算と優先政策の巨大な軍事化を促進している。トランプの、外交一般と、とりわけ国務省に対するあからさまな蔑視は極端すぎるかもしれないが、彼が賛美する「全面領域支配」は、いまや、アメリカの政治文化の遺伝子に深く組み込まれているのである。

*

このような状況に日本は全く安心していられないが、かといってここから逃れることもできない。第二次大戦後、アメリカ合衆国が日本を占領して以来、日本は、ワシントンから発令される誤った戦略政策に対して、自主的な、あるいは実質的な批判を述べられる立場にはなかった。

米ソの核兵器競争が世界を消滅させる恐れがあった、一九五〇年代から八〇年代にかけての脅威的な数十年間は、とりわけそうであった。一九六〇年代から七〇年代初期にアメリカが東南アジアで残虐な戦争を行っていたときの、日本政府のアメリカ政府への盲目的従属は明白であった(東南アジアでの戦争では、アメリカ軍はベトナム、ラオス、カンボジアに、一九四五年に日本の六〇を超える都市に対する破滅的な空襲で使った爆弾の、四〇倍以上にのぼる量の爆弾を投下した)。アメリカの残酷な軍事力使用に対する中毒状態への日本の服従は、二〇〇一年九月一一日の世界貿易センターと国防総省ビルへのアルカイダによるテロ攻撃に続いて、アメリカが全く誤った考えから始め、最終的に大失敗に終わった、アフガニスタンとイラクへの侵略戦争でも繰り返された。本書でのアフガン・イラク戦争問題やアメリカ軍によるその他の多くの暴力ケースに関する分析では、日本についてはほとんど触れなかった。しかし、この日本語版の読者は、日本政府が、いやそれのみか日本の政治家たちが個人的にも、実質的にはアメリカの行動全てを支持していたということを心にとめておくべきである。

戦後、アメリカ合衆国との同盟関係の下で、日本が、多くの面で成功をおさめてきたことは誰も否定できない。日本は豊かな国になった。民主主義も機能している。この点、隣国である中国については、同じことは言えない。全体的にみれば、国民は反軍国主義を支持している。アメリカの巨大な「国家安全保障国家」や「監視社会」に相当するようなものは、いまだ日本には存在しない。日本は

重要な兵器輸出国でもないし、年間国家予算が飽くことを知らない戦争機構の維持に重きをおいているということもない。

これらの事態は、日本がまだ占領下にあった一九四六年に国会で採択された「平和憲法」のビジョンと理想を、国民が支持し続けてきたことを反映しており、この日本語版序文を書いている現在に至るまで、この憲法は変更されていない。日本の保守主義者や新愛国主義者たちが熱望しているように、日本がもっと「普通の」軍事化を促進するために憲法を変更するようなことがあれば、戦後日本国家の性格を変えることは間違いない。しかしながら、そのような憲法の変更が行われても、そのことで、今日まで日本の安全保障政策を特徴づけてきた、アメリカ政府の指令に対する日本の従属と追従に変化が起きることは全くない。いやそれどころか、日本政府は、トランプと彼のアドバイザーたち(さらにはその後のアメリカ政府の継承者たち)が着手すると思われる新しい軍事戦略に、それがいかに思慮不足で好戦的なものであろうと、「積極的に」貢献するようにとの圧力をますます強く受けるようになるであろう。

過去数十年の「アメリカの世紀」における、世界的な広がりでの暴力の極めて多様な歴史を見てみるならば、このような将来にはあまり期待は持てそうもない。

二〇一七年八月五日

ジョン・W・ダワー

＊訳者注：英語原書の題名は *The Violent American Century* であり、著者が英語版序文（「はじめに」）でも説明しているように、ヘンリー・ルースが一九四一年に発表した評論の題名 "American Century"（アメリカの世紀）を利用し、それに "Violent"（暴力の、暴力的な）という形容詞がつけられている。したがって、文字通りの日本語訳は「暴力的なアメリカの世紀」となる。しかし、題名が読者に与えるインパクトを考えて、岩波書店編集部の提案で日本語訳の書名は『アメリカ 暴力の世紀』とした。

＊以降、〔 〕は訳者による注を、［ ］は原書の著者による補足を示す。

はじめに

二〇一五年、日本の岩波書店が全九巻のシリーズ、岩波講座『現代』の第一巻を出版したが、これに私は「第二次世界大戦以降の戦争とテロ」と題する論考を寄稿した。この小著はその論考をもとに書き下ろしたものである。

テーマは元の論考と同じであるが、『ライフ』などの雑誌の創刊者、ヘンリー・ルースが一九四一年に同誌に発表した評論の題名「アメリカの世紀」をもじり、実際には長く続いてきた憂うべき状況を表すために「暴力の」という形容詞をつけた書名にした。ルースのこの評論の大げさな題名が人気を博したのには明らかな理由がある。アメリカは実際、第二次世界大戦が終わるや否や、世界で最も豊かで、強力で、影響力のある国家として出現した。そして今もその状況は同じである。しかしながら、それには、そのような国家としての適格性が問われなくてはならない。

戦後数十年にわたって、「パックス・アメリカーナ〔アメリカ支配による平和〕」という大げさな表現が使われてきたにもかかわらず、実際にアメリカ合衆国が世界の覇権を得るにまで至ったのでは全くなかった。一九四五年から九一年まで続いた「冷戦」は、アメリカとソ連の二つの超大国、あるいはもっと一般的には、資本主義と共産・社会主義の二大「陣営」あるいは二大「ブロック」が敵対する

危険な時期であった。しかし、この二極拮抗という言葉も、実際には分断され混乱状態にあった世界の状況を表すには、単純化しすぎた表現であった。

さらに、一九九一年のソヴィエト連邦の崩壊とそれに続くアメリカの世界「唯一の超大国」としての出現にもかかわらず、二一世紀には、「アメリカの世紀」という自惚れを退ける理由となるような事件がますます多く起きるようになった。冷戦の終焉は、確かにアメリカ合衆国の記念すべき勝利であったし、それとほぼ同時に起きたごく短期間の湾岸戦争でのイラク軍に対するアメリカの圧勝は、デジタル技術と精密攻撃兵器を駆使する新しい時代のアメリカ軍が、敵にとって攻略不可能の能力を保持していることを確認することにもなった。この二重の勝利は、しかしながら、実際には欺瞞的なものであった。

アメリカ合衆国は、その圧倒的な軍事力にもかかわらず、冷戦期の朝鮮戦争とベトナム戦争では停戦と敗北を経験した。冷戦終焉の一九九一年からわずか一〇年後の二〇〇一年九月一一日、アルカイダによる世界貿易センターと国防総省ビルへの攻撃が実行された。これに対する応酬としてアメリカ政府が開始した「テロとの世界戦争」は、拡大中東圏に終わりの見えない不安定と混乱を引き起こしたことで、アメリカの軍事的失敗を再び証明してしまった。アメリカ政府にとってひじょうに無念であったと同時に失望的であったのは、国防総省の先例のない技術的優位性が、主として低レベルの不規則な戦争に関わっていた、ほとんど無秩序ともいえる非国家集団や国家集団によって挫折させられたことであった。

かくして我々は、豊かで、自国を美辞麗句で賞賛する見事な武装国家、巨大な軍事力と過度の傲慢

さをもつ国家である一方で、深刻な被害妄想、失敗感、病的逸脱に苛まれている国家という、矛盾に満ちた状況に直面している。こうした事態にもかかわらず、「アメリカの世紀」という造語は、今も役に立つと私には思えるのである。良し悪しは別にして、アメリカは、世界で対抗できる国がない国家として聳え立っている。その経済力はどこの国にも負けない。その繁栄と表向きの理想は多くの人々をいまだに感動させる。アメリカが行う戦争(あるいは平和維持)が成功しているかどうかについてはいろいろな判断があるものの、その影響力がいまだ大きいことは確かだ。世界はかつて、これほど広範囲に分散する諸外国に、これほどまでに多い軍事基地を持つ国家を見たことはない。二一世紀の一〇年代には、アメリカはほぼ七〇カ国で八〇〇以上の基地を持ち、一五万人の兵員を配属している。アメリカの年間の軍事関連予算は、世界のその他のほとんどの国々の軍事関連予算を合計したものより大きい。想像可能な最も精密な破壊手段の維持とその絶え間ない最新化、そして、それに追随しようとする同盟国や仮想敵国に対する威嚇という点では、アメリカに匹敵する国は全くない。

欠陥と失敗の両方を伴うアメリカの抜群の軍事力は、第二次世界大戦後に現れた「アメリカの世紀」の重要な側面である。この軍事力と並んで、戦後の長い時間ずっとその通奏低音のように流れ続けてきたのが、この本の題名の一部である「暴力」である。かくして、この本の極めて直接的な、しかし中心的な関心は、一九四五年以降、世界の武力紛争と戦争によってもたらされた死と苦難、精神的苦痛などの広範囲性、大規模性、多様性を簡潔に概観し、描写することにある。それには、アメリカ合衆国がなんら関わりをもたなかったと思われている、あるいはごく周辺的な関わりしかもたなかったと考えられている大量虐殺、政治殺戮、内乱、局地的紛争も考察の対象とする。同時に、アメリ

カは、アメリカ人の大半が思っているより、あるいは関心があるよりもずっと、頻繁に海外で暴力行為に関わってきた。そのような暴力は、公的な海外派兵によって、あるいは国連またはNATOの活動の一環として使われたが、しかし、しばしばアメリカ一国だけの不法の「暗闇」の作戦でも使われた。冷戦中も冷戦後も、アメリカ合衆国はソヴィエト連邦ならびにその継承国ロシアと同様に、代理戦争、武器輸出、独裁政権支援を通して暴力行為を幇助したのであり、アメリカの場合はそれらがみな、いつも、平和、自由、民主主義という名称の下に行われた。こうした外国への介入行為の多くが反米という反動を生み出したし、今も生み出している。

戦争関連暴力に焦点を当てることで私は、戦後数十年にわたる時期は比較的平和な時期であり、一九四五年以来、世界の暴力は急減したと主張する現在の学術研究の傾向には逆らう形をとる。しかし、私は、暴力減少主張派の議論に直接反論するためには時間を割かない。暴力減少主張派は統計数字が表すおもしろい傾向に焦点を当てるが、私はそれとは異なった方法で、もっと悲惨な面に焦点を当て、軍事暴力を様々な局面から検討することで、世界がなぜそうなっているのかを説明してみたい。私の分析の焦点の一つは、一九四五年からソ連が崩壊した一九九一年までの時期に充てられるが、死と荒廃が世界を覆ったこの時期が「冷戦」という名称で呼ばれることは、冷酷で偏狭な冗談としか思えないのである。

二一世紀の二年目以来、我々は「テロ集団」と「テロリズム」に対するみじめな恐怖感にいつも取り憑かれている時代に生きてきた。しかし、この種の非道な行為は決して新しいものではない。大規模な国家テロがヨシフ・スターリン支配下のソ連や毛沢東支配下の中国の共産主義国家で行われたが、

主としてそれは国内に存在する敵と考えられた者たちに向けて行われ、両国の評判にいつまでも汚点を残すことになった。しかしながら、9・11事件以来、テロは主としてアルカイダやISIL(イラク・レヴァントのイスラム国家)、その他の同種の非国家組織によって繰り返し行われる残虐行為という形で、アメリカ人と西側諸国一般の人々の意識に入り込んでいる。それらのいずれのケースも、アメリカ以外の国家や組織によって行われるテロに焦点が当てられている。

こうしたテロリストの暴力行為については本書の中でも触れる。しかし同時に、本書では、一般的にはタブーとなっている、アメリカ合衆国とその同盟諸国が行っている国家テロという問題に特別の注意を払う。こうした国家テロの中には、人口が密集した市や町を意図的に攻撃目標として破壊し、敵の士気も破壊するために、第二次世界大戦時から一九五〇年代の朝鮮を経て一九六〇年代、七〇年代の東南アジアに至るまで長年、広範囲にわたって行われた戦略爆撃が含まれている。冷戦を扱う章では、アメリカの戦略家たちが、核軍拡競争の「テロ(恐怖)の微妙な均衡」と呼んだ問題について議論し、本書の終わりの方では、敵を脅迫するこの狂気じみた行動が現在では「核兵器の現代化」という形で復活している事態を紹介する。さらに、一九八〇年代を取り扱う別の章では、拷問を含む「反共産主義」テロを行ったラテンアメリカの右翼政権や反乱組織をアメリカが支援していたケースを取り扱う。

9・11事件に対応してジョージ・W・ブッシュ政権が「テロとの世界戦争」を宣言し、大失敗に終わるアフガニスタンとイラクへの侵略を開始したとき、それを多くの人がアメリカのそれまでの政策方針からの逸脱であると批判したが、実際にはそうではなかった。アルカイダの一九名のテロリスト

によって実行された残虐行為に対する過度の反撃――二〇〇三年のイラク侵略では、「衝撃と畏怖」を与えるための大規模爆撃により始められた――は、基本的には、すでにそれ以前からの海外への介入で経験済みの戦争執行機関の活用と同じものであり、猛烈な空爆、秘密作戦、拷問のような「犯罪的な」活動を含むものであった。

この本の比較的短い本文につけられた長い脚注の多くの部分は、アメリカの世紀において絶え間なく続いている軍事技術の発展と、それに伴い軍内部で使われている特殊用語に関する私の個人的な興味を反映している。軍人の話し方では軍事用語が頻繁に使われることからも分かるように、軍事政策を練り上げるときに使う言葉が文字通り、紋切り型になる(しかも、軍隊の場合は、とりわけ頭文字の組み合わせでの表現が頻繁に使われる傾向が極めて強い)。これはグループ同一思考を作り出すことになるが、このグループは、冷戦終焉とコンピューター化された戦争が同時に起きたときのように、その時々の状況変化や技術的必然性によって戦略を再考するための柔軟性を持っていなければならない。脚注の多くの注釈は、こうした言語、技術、戦略が重層する内部情報に注意を払っている。内部情報とは、機密扱いからはずされた計画書類、機密扱いとはなっていない任務報告書、軍隊下部組織で使われる「拷問手引書」、シンクタンク(頭脳集団)による研究成果、トップレベルの政策決定文書、元戦略立案者やCIA工作員が何を見たのか、また、窮地に追い込まれた状況の中で自己批判的に厳しく考え直すことで何をしたのか、といった回顧録などである。

脚注はまた、この本が、第二次世界大戦後の世界における暴力の様々な悲惨な局面について鋭い分析を行ってきた、多くの調査専門家の仕事に負っていることを示している。さらに、トム・エンゲル

ハートとニック・タースからこの本の執筆にあたって受けた支援はひじょうに貴重であった。この両名は鋭利な論述の発表と貴重なウェブサイト「トム・ディスパッチ」により、報道記事の批評内容に高い水準を設定している。一九六〇年代末の大学院時代からの私の親友であるトムは寛容にも、しかしときには厳しい目で最終草稿を編集してくれ、ダオ・X・トランはコピー・エディターとして私の拙い表現を注意深く読み、なめらかにすることで助けてくれた。しかし、言うまでもなく、本書のすべての内容と欠点に関して責任があるのは私自身である。

二〇一六年九月三〇日

第二次大戦および冷戦の覇者、アメリカ。そのアメリカは、どのような経緯で現在の世界の、そして自国の混沌を生み出してしまったのか。

大ベストセラー『敗北を抱きしめて』の著者があらたに取

アメリカ 暴力の世紀

目次

第二次大戦および冷戦の覇者、アメリカ。そのアメリカは、どのような経緯で現在の世界の、そして自国の混沌を生み出してしまったのか。

大ベストセラー『敗北を抱きしめて』の著者があらたに叙

日本語版への序文 vii

はじめに xvii

第1章 暴力の測定 1

第2章 第二次世界大戦の遺物 019

第3章 冷戦期における核の恐怖 027

第4章 冷戦期の戦争 047

第5章 代理戦争と代行テロ 065

第6章 世界の旧体制と新体制 一九九〇年代 081

第7章 9・11事件と「新しいタイプの戦争」 099

第8章 不安定の連鎖拡大反応 121

第9章 七五年目の「アメリカの世紀」 137

注 145

訳者あとがき 181